

慶州・四天王寺跡の発掘調査

1 はじめに

当研究所では大韓民国・国立慶州文化財研究所との共同研究において、2006年度より新たに「日韓発掘調査交流協約」を結び、双方の発掘現場への研究員の参加を中心とする研究交流をはじめた。本年度はその2年目にあたり、9月18日から11月15日の間、筆者が慶州へ赴き、四天王寺跡や月城垓字の発掘調査に参加した。

四天王寺跡の発掘調査は2007年4月より開始され、同年12月26日には諮問委員会・現地説明会がおこなわれた。筆者の調査への参加は一時期に限られるが、公表資料等¹⁾を踏まえて、今年度の調査成果を報告する。

2 四天王寺の概要

沿革 『三国遺事』には、文武王9・10年(669・670)に、唐の新羅侵略に対して発願され、造営が進められた様子が記される。また、『三国史記』には、文武王19年(679)8月に「四天王寺成」とあり、少なくとも伽藍中樞部は完成していたとみられる。これらのことから考えて、四天王寺の創建は、統一新羅初期の670年代頃であるといっていよう。一方、四天王寺の廃絶については、明確な記録が残っていないが、少なくとも高麗時代までは法灯を伝えていたとみられる(『高麗史』卷9文宗28年(1074)条)。

廃絶までの間に、正確な時期は不詳であるが修理がおこなわれたようである。それは、これまでの調査で出土した「四天王寺己巳年重修瓦」銘の瓦からうかがわれる。**伽藍配置** 礎石の残存状況が良く、伽藍配置は、すでに戦前の調査によって二塔一金堂形式であることが明らかにされている。金堂の背後東西には、経楼もしくは壇席と推定される²⁾3×3間の小規模建物跡が対称にある。また、さらにその背後中央には講堂跡があるとみられるが、現在は鉄道線路が横切るため明らかでない。

2006年度の第1次調査では、西面回廊と、西木塔の発掘調査がおこなわれた。木塔の規模や構造が明らかになるとともに、金堂から西に伸び、回廊に接続する軒廊が新たに確認された³⁾。



図24 慶州遺跡分布図

(中尾芳治ほか『古代日本と朝鮮の都城』2007より佐藤興治作図を一部改)

3 金堂の発掘調査

今年度は、金堂と、昨年度に引き続き西面回廊と西木塔等の追加調査をおこなった。本稿では、今回初めて全面的に発掘をおこなった金堂の調査について報告する。**規模** 礎石の遺存状態が良好で、南側まわりの3基を除くと、ほぼ原位置を保っている⁴⁾。桁行(東西)5間、梁行(南北)3間である。柱間距離は桁行中央3間が約3.55m、梁行中央間が約4.33mで、桁行両端間が約3.55m、梁行両端間が約3.68mである⁵⁾。また、金堂礎石の標高は西塔心礎の標高よりも32cm低い⁶⁾ため、金堂建物基壇は塔よりも低く造営されたと推定される。

基壇 二重基壇で、下成基壇⁷⁾は東西24.48m、南北18.17mをはかる。地覆石〔長台石〕⁸⁾が一部遺存する。上成基壇は東西20.90m、南北14.59mで、地覆石〔地台石〕と羽目石〔面石〕が一部遺存する。上成基壇地覆石は長いもので4.60m、短いもので1.28mとばらつきがある。その上面には東石や隅東石〔隅柱〕を据える浅い溝が掘られる。溝の形状には長方形、もしくはT字形があるが、その配置に明確な規則性はない。上成基壇南面の地覆石には、修理の際に、地覆石上の部材の据え換えなどによって、創建時の溝を残したまま新たな溝が設けられたと推察される。

上成基壇地覆石〔地台石〕と下成基壇地覆石〔長台石〕の距離は1.6mで、一辺32cmの磚が5枚敷かれたと考えることができる。

階段 金堂の階段は基壇南北面に各2基、東西面に各1基配置されている。北面と南面の階段は対称位置になく、南面は桁行両端間に、北面は桁行両端より2間目に配置されている。現存する西面階段の南北幅は外面間で



図25 四天王寺跡金堂全景写真(上が北)

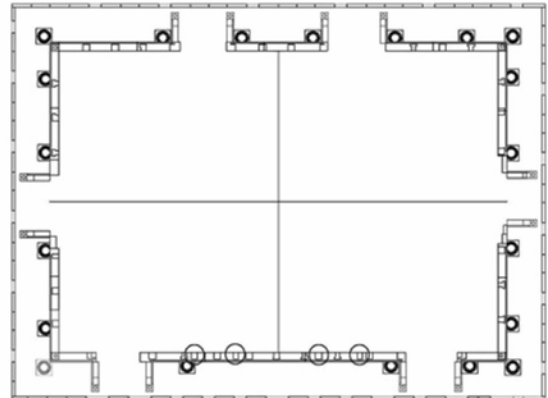


図26 四天王寺跡金堂平面図(上が北) 1:350

約2.9mだが、これは修理時に縮小したもので、創建当時は幅約4.64mとみられる。軒廊と接続する部分が他の階段よりも広く設けられていたようである。

北面東階段の地覆石は、長さ2.22m、幅44cm、厚さ24cmで、上面中央部分に長さ74cm、幅37cm、深さ5cmの溝が切られている。

建物内部 金堂内部の中央には、長方形の台石が2基、長さをそろえて据えられている。南北232cm、東西合計260cmをはかる。本尊の台石と推定される。その西方には直径120cmの円形台石があり、東方の対称位置にも、遺存状態が良好でないが同様の台石が存在する。これらは脇侍の台石とみられる。この円形台石の南方左右には、直径約62cmの壺形の礎石が1基ずつ据えられ、いずれも径約19cmの円孔を有する。天蓋をかけるための柱の礎石とみられる。

このほか、金堂内部の礎石周辺で、板石と無文磚による石(磚)列が確認された。この周辺から鉄釘が多く出土しており、木造の隔壁施設、又は仏壇が存在した可能性がある。ここからは、緑釉菱形磚も多く出土した。

円形礎石 上成基壇地覆石の周囲には、基壇上の礎石と筋をそろえた小型の円形礎石が巡らされている。地覆石と接するように加工され据えられている。この加工が後代のものとみられる点、円形礎石のかわりに、割石を集めて機能させている箇所がある点から、これらが創建当時のものでない可能性がある。

出土遺物 瓦磚類、土製品、鉄製品などが出土した。瓦磚類としては蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦が主体をなすが、上成基壇地覆石周辺では、鬼面文瓦が多く出土した。また、下成基壇上面に敷かれた磚には、宝相華文磚、蓮華文磚、無文磚が確認された。

4 おわりに

今回の調査で、統一新羅初期に創建された寺院の様相が具体的に明らかになった。金堂の基壇外装の詳細、階段の規模と配置、内部の仏像との関係などで注目すべき成果が多い。これらは新羅のみならず、東アジア全体の寺院研究に寄与するところが大きい。

今後、四天王寺跡の発掘調査は、東塔、「壇席」、東回廊などに対しても進められる予定である。次年度以降も日韓発掘調査交流を通じて、双方の成果を共有することで、研究の深化が期待される。 (中川あや)

註

- 1) 国立慶州文化財研究所「慶州 四天王寺址 発掘調査(2次)」会議資料、2007。
- 2) 張忠植は『三国遺事』巻第二文虎王法敏条の「至今不墜壇席」を根拠として、この建物を「文豆婁秘法」にかかわる壇席とみている(張忠植「新羅 狼山遺蹟의諸問題(Ⅰ) -四天王寺址를中心으로-」『新羅文化祭學術発表會論文集』17、新羅文化宣揚會、1996)。
- 3) 国立慶州文化財研究所「慶州 四天王寺址(史蹟第8號)」諮問委員會資料、2006。
小田裕樹「新羅王京の発掘調査」『紀要2007』。
- 4) 基壇の南方に朝鮮時代の墳墓がつくられ、その際に南側の礎石3基が動かされたようである。
- 5) 側柱の礎石が原位置よりも外側に若干押し出されている可能性があり、その場合、梁行両端間の柱間寸法はもっと狭くなる。
- 6) 註1前掲文献には、「二重基壇」という表現は用いられているものの、上成基壇・下成基壇という言葉は用いられておらず、筆者の解釈による。
- 7) []内は註1前掲文献における用語である。